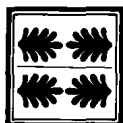


サスペンス・ゾーン

ミステリー傑作選6



強烈なサスペンス、スリリングな事件の展開、そして意外な結末。絶対の自信をもって取り揃えたミステリーの特別メニュー。名づけて「サスペンス・ゾーン」



講談社文庫

サスペンス・ゾーン

ミステリー傑作選 6 日本推理作家協会編

昭和51年3月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国オフセット株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社大進堂

© Nippon Suirisakka Kyokai 1976

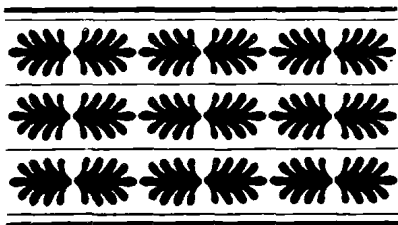
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

サスペンス・ゾーン

ミステリー傑作選 6



日本推理作家協会編

講談社

目次

男一匹

水難の相あり

黄色い吸血鬼

闇の中の子供

大使「夫人」誘拐事件

小梅富士

企業特訓殺人事件

海からの招待状

淫らな証人

たそがれ

古印譚

奇妙な被告

汚れた刑事

たった一人の鉱山

不道德な天使

生島治郎 七

鮎川哲也 二九

戸川昌子 七二

小松左京 二〇七

佐野 洋 一六三

都筑道夫 二〇六

森村誠一 一三六

笹沢左保 二六九

土屋隆夫 三〇四

星 新一 一三八

陳舜臣 三〇七

松本清張 三八三

結城昌治 四三四

草野唯雄 四六八

三好 徹 五〇〇

日本推理作家協会は、その前身日本探偵作家クラブからの継承事業の一つとして、毎年「推理小説年鑑」の編集を行なっている。

これは、その年に各雑誌に発表された、短編推理小説の代表作を選んで、一冊のアンソロジーにしたもので、各年度の推理小説の傾向、主に活躍した作家たちなどを知る上に、絶好の手引きであると、推理小説ファン、研究者各位から、好評を博して来た。

だが、これらは部数に制限のある関係上、バック・ナンバーは二、三年前のものすら、入手しにくく、協会書記局にお問い合わせがあっても、何ともなし得ない状態であった。

そのバック・ナンバーが、このたび、年鑑の出版元である講談社から、文庫版の形で出版され、ファンの要望に応えられることになったのは、関係者にとって、何よりの喜びである。

かつて、読書界の一隅に、マニアの形で存在しているに過ぎなかった推理小説ファンは、松本清張氏の出現を契機として爆発的に増え、その後も年々増加の傾向をたどっているようだ。そのことは、月々の小説雑誌に、何らかの形で推理小説が顔を出している事実からも言い得よう。そして、ファンの増大は、必然的に、推理小説界にも、変化をもたらした。その第一は、ジャンルの多様化であろう。謎とき、ハード・ボイルド、心理スリラー、スパイもの、社会派推理小説、さらにSFミステリーまで、まさに百花斉放の趣きがある。

このようなミステリーの諸ジャンルを楽しむためにも、また、手軽な入門書としても、このシリーズが、十分にお役に立つと自負している。なお、本巻は一九七一年の「推理小説年鑑」によるものである。

サスペンス・ゾーン

ミステリー傑作選 6

男一匹

生島治郎

著者紹介 昭和八年上海生まれ。
「クイーンズ・マガジン」の編集長
をつとめた。昭和三十九年「傷痕
の街」を発表し作家に転身。四十
二年「追いつめる」で直木賞受賞。
日本のハードボイルド小説の旗手
である。主作品「死者だけが血を
流す」「男たちのブルース」など。

凍てついた闇をふるわせて、自動車の警笛の音が二度、重々しく鳴った。

少年はその音を耳にすると、布団の中ではと身を硬くした。こごえそうな寒さにもかかわらず、掌にじつとりと汗がにじみだしてくる。息をつめ、彼は隣に布団を並べている母親の方をうかがった。向うに顔を向けているので表情はわからないが、母親は静かな寝息をたてているように思えた。布団の中で寝衣をすばやく脱ぎすてると、少年はそろそろと右手を伸ばし、枕元にあったズボンとセーターをひきこんだ。ズボンをはき、セーターをかぶる——その動作を彼は母親の方をうかがいながら、慎重にやった。着終った時には、身体中が汗に濡れていた。ほっと一息吐き、少年は起きあがった。そこは六畳一間きりのせま苦しい安アパートの一室だった。出口へ辿りつくまでには、母親の布団のすそをまわっていかねばならない。

足音をしのばせ、彼は出口に向った。扉の横の壁に打ちつけてある釘から、色あせた黒い革のジャンパーをつかみとろうとした時、背後から声がした。

「雅。どこへ行くんだい？」

少年はふりかえった。上半身を起した母親がじっとこっちをみつめている。干しかためたような色の黒い小さな顔に白く光る母親の眼を見下ろした少年の表情にふてぶてしさがひろがっていった。

「どこへ行くこうとおれの勝手じゃねえか……」

袖を通さず、ジャンパーを肩にひっかけながら、彼は云った。

「おれだって、もう一人前だ。いちいち母さんに断わらなくても夜遊びぐらいしたっていいだろう」

「おまえは一人前なんかじゃありません」

母親はびしりと云い返した。

「自分ではそのつもりでも、ことの良し悪しを決められやしない甘えん坊だ。そのことはあたしが一番よく知っている。雅、近頃、おまえは変だよ。わるい友達とつきあっているんじゃないだろうね？」

「うるせえな」

少年は眉をしかめた。

「おれが誰とつきあおうと大きなお世話だ。おれはおれの好きなやつらとつきあう。母さんにあれこれ口出しされるのはもううんざりだよ」

「へえ……」

母親はまばたきもせず、まっすぐに少年の方をみつめた。

「ずいぶんえらくなったものだね、おまえも……。いつから、母さんにそんなことが云えるようになったんだい？ 雅、あたしはおまえを、自分の手ひとつで十八年間育ててきたんだよ。父さんがいなくなつてからというものは……」

「わかった。わかったよ」

少年はげしく首をふつた。

「いつでもそれだ。おれを十八年間、育ててやった。女手ひとつで苦勞のしどおしだった。大したもんだよ、母さんは。そのあげくに、おれをこんな安アパートに閉じこめておこうというのか……。え？ こんなうす汚ないところで生きていたってなにになるんだい？ いやだね、おれは……。真平だ。おれはもつとでっかいことをやるんだ。男らしいでっかいことをよ。そして、こんなじめついたところからぬけだしてやるのさ」

「そっくりだね……」

つぶやいて、母親は眼を閉じた。四十代の女とは思えないほどしわだらけの陽に灼けた頬を涙がつたわった。

「おまえの父さんもそう云った。十八年前のことだ。そして、おまえがお腹にいるあたしを置いて、出ていってしまった。あの人はヤクザの仲間入りしてしまったんだ。太腿に男一匹という彫りものなんかしていたが、あの人は男なんかじゃなかった。人間の屑だった。あたしはおまえに、あんな屑にだけはなってもらいたくない」

「いいかい、母さん」

少年は大人びた表情をつくり、自分に云いかけせるように声をひそめた。

「おれは母さんを捨てやしねえ。母さんにこんなみじめな暮しをさせたくねえんだ。今に、あれがあつた男のおふくろだつてみんなに頭を下げさせるような人間になつてみせる。そうなるにはチャンスが必要だ。そうだろう？ え？ おれはそいつを拾うんだ。チャンスをものにすれば、おれだつてのしあがれる。広いマンションや、車、うまい料理……。母さんが日やといに出ていくことはもうないんだ」

「世間はそんなに甘いものじゃないのさ」

母親は哀しげに首をふつた。

「いっぺんに大きなことをやろうとすると、必ず失敗する。おまえはまだ若いからわからないだろうけれど、地道にこつこつかせいでいくのが一番だよ。あんたの父さんだつて、今はきつと失敗してみじめな思いをしているにちがいない。だから、帰るにも帰れないのさ」

「おやじのことなんか知っちゃいいねえ」

少気は唇をふるわせた。

「おれはおやじの真似をしているわけじゃねえ。おれは——そう、おれはおれなんだ」
「そうじゃない」

母親の言葉は暗い呪咀がこもっているようにさへ聞えた。

「おまえは父さんそっくりなのさ。おまえには父さんと同じ血が流れている……」
もう一度、警笛が重々しく闇をふるわせた。

少年は顔をあげた。

「おれ、行かなくちやならねえ」

ぱつと扉をひき開けると少年は廊下へ消えた。

母親は黙ったまま、身じろぎもせず、少年が出ていった扉口をみつめていた。

木造アパートの前につややかに光った鋼鉄色のセダンが駐^{とま}っていた。窓の中は暗く、運転席にポツンと赤い煙草の火が見える。

少年は運転席に走り寄った。コツコツとガラスをたたき、おびえたように云う。

「おれだよ、兄貴……」

窓は音もなく開いた。口の端に煙草をくわえたもの憂そうな表情の男が少年の方に顎をしゃくった。

「助手席の方へまわんな」

ほとんど聞きとれないほどの声だった。

少年は助手席の方へまわり、扉を開けて乗りこんだ。車の中は暖かく、むれた革の匂いがこもっていた。少年は新鮮な空気でも吸うようにその匂いを吸いこんだ。革の匂いは車の座席と男の着ているカーコートから匂ってくる。しぶい枯葉色のスウェードのコートだった。少年は羨ましそうにそのコートをみつめた。

「兄貴はおしゃれだなあ。そんなコートはあつらえてつくるのかい？」

「つまらねえことを云うんじゃねえ」

男がノークラッチのギアをドライブにセツトすると、車はすべるようにスタートした。

「今度の仕事さえうまくやりさえすりゃ、おめえだって、いい顔になれる。組内でいい顔になるってことは、銭になるってことだ。こんなコートなんざ、くさるほど買えるぜ。だから、今はおめえは自分のやる仕事のことさえ考えていりゃいいんだ」

「わかつているよ」

少年は真剣な顔でうなずいた。

「おれはへまはやらねえ」

「そうみこんだから、おれも組長^{おやじ}におめえにやらせるよう口を利いてやったのさ」

男は短くなった煙草を窓外に捨てると、すぐにまた新しい煙草をくわえた。

「うちの組にも若え衆は大勢いるが、こんな仕事をやるような度胸のあるやつは、そうたんとはいねえ。おめえは願ってもないチャンスを与えられているんだ。しくじっておれの顔をつぶしてくれるなよ」

「大丈夫だ」

少年は汗ばんだ両手をこすり合せた。

「兄貴にはすまねえと思ってる。恩にきるよ。いずれ、一人前になったら礼はさせてもらうぜ」

「ふふん」

男は鼻先で笑った。

「仕事の前には誰だつてでかい口はたたける。ところが、いざ相手と向いあうと、ブルっちまうんだ。特に今度の相手は大物だ。おめえみたいなチンピラとは貫禄がちがう。貫禄負けしてまごついていると、逆に料理されてしまうぜ」

「おれはちがう。怖かねえ」

少年は乾いた唇を舌の先でなめた。

「自信があるんだ。こうと決めたことは今までも必ずやってきた。どんなデカイ相手でもブルったことはない」

「おめえがあんまりイキがるから、こっちはかえって心配になるのさ。チンピラ同士の犬コロのじゃれあいみたいな喧嘩^{ケンカ}とはわけがちがうんだ。人間一人を殺^{ころ}す仕事^{しごと}だぜ」

男は煙草の煙^{けむり}を吸いこむと、首をすくめた。

「おれもおめえぐらいの年頃^{としごろ}のとき、そんな仕事をしたことがある。それが、おれの若衆頭^{わかしゅどう}にまでの上^{うへ}がる最初のチャンスだった。だから、おめえを見てみると、その時の自分を思いだすのさ。おれは怖^{こわ}かった。無我夢中^{むげむちゅう}だった。気がついたときには、相手が自分の足もとに転がっていた。刑務所^{けいむしょ}でおつとめをしているときも、そのことを夢にみて、何度も夜中にとびあがったもんだ。殺した相手が夢に出てくるっていうが、おれの殺した相手なんかどうとも思^{おも}ってねえ。死体^{したい}になったやつなんか怖いもんか。それよりも、相手と向いあつた瞬間^{しゅんかん}が怖いんだ。そのときのことを思いだすと、冷汗^{れんあせ}がでるぜ」

少年は黙^{もく}っていた。

それを横目で見ながら、男は話をつづけた。

「いいか、やめるんなら今のうちだぜ。今なら、まだやめられる。当分、三下で使い走りをし、他人に頭を下げなくちゃならねえが気は楽だ。ただイキがつて、しくじられたんじゃ、モトもコもねえ。どうだ？ やめるか？ このまま車をおめえのアパートまでもどせばそれでいいこつた。組長には、おめえがやめにしたと云つていてやる」

「いや、やめねえ」

ふるえながらも、少年はきつぱり云つた。

「おれは学校もロクに出てねえし、腕に技術もねえ。この世界で大物になるしか道はねえんだ。とすれば、このチャンスですてるわけにはいかねえ。そうだろ？ 兄貴。たしかに、兄貴の云うとおりだ。おれは怖い、怖いとも。ガタブルだ。しかし、おれはやってみせる。ヘマはやらねえ。兄貴、やらせてくれ……」

「わかつた」

男は大きくうなずいた。

「そこまで腹が決っているなら、やってみろ」

二人はそのまましばらく黙りこんだ。

車は住宅街の中へ入り、鉄筋コンクリート三階建の邸の前に停つた。そのどっしりした建物は他の住宅を圧して、夜目にも白く、小さな要塞を思わせた。

「着いたぜ」

男は云つて、少年の方をふりかえつた。

「もうひとつ訊いておくが、おめえ、この仕事のことを誰かにしゃべつてねえだらうな？」

「いいや、しゃべりやしねえ」

少年はあわててかぶりをふった。

「しゃべるわけがねえじゃねえか……」

「ま、いい。おめえはいつたい誰をどうやるのか教えてもらっていいねえんだから、詳しいことはしゃべりようがない。ただ、おめえの肉親が恋人でも心配して、私立探偵でも尾けられたら、仕事をするのがやっかいになる」

男の眼が細められ、急にけわしくなった。

「おめえ、アパートから出てくるのがバカに遅かったな。合図では、二回警笛を鳴らせば出てくるはずだった。おれは十分待つて、もう一度鳴らした。その十分の間、なにをしていた？」

「すまねえ」

男の眼に射すくめられたように、少年は身体をちぢめた。

「おふくろが夜遊びに行くなとかなんとか、ぎゃあぎゃあ云いやがったんだ」

「ほんとに、それだけか？」

「ほんとに、それだけさ」

「そうか……」

うなずいて、男はまた新しい煙草に火を点けた。

「女つてものはいつても男の仕事の邪魔をしたがるもんだ。やつらには、男の仕事つてものからならぬ。それで、女の云いなりになっていたひにや、いつまでたってもいっちょ前の男にはなれねえのさ……」